

6 つるみねそうだい ちてんいせきしゅつどひん
 鶴峯荘第1地点遺跡出土品 126点 [有形文化財（考古資料）]

（ナイフ形石器7点 翼状剥片57点 翼状剥片石核37点 石器接合資料25点）

[所在地] 香芝市藤山一丁目17番17号 香芝市二上山博物館

[所有者] 香芝市教育委員会

[出土地] 香芝市穴虫小字十丈坊

[時代] 旧石器時代

[概要]

鶴峯荘第1地点遺跡は、香芝市穴虫に所在する。サヌカイトの原産地遺跡である二上山北麓遺跡群を代表する旧石器時代の遺跡である。1970年代に刊行された分布調査報告書のなかで、鶴峯荘第1地点遺跡の採集品を中核とする資料群の分析をもとに、瀬戸内技法が再定義された。

瀬戸内技法とは、サヌカイトの特性に適応して規格的な横長剥片を獲得する石器製作技術である。原石から盤状剥片を獲得する第1工程、盤状剥片を石核として翼状剥片を連続的に剥離する第2工程、翼状剥片に整形剥離を加えてナイフ形石器に仕上げる第3工程からなる。西日本を中心に広がった、体系的で完成度の高い技術である。

本件は、昭和59・60年度（1984・85）に香芝町（現 香芝市）教育委員会がおこなった発掘調査によって出土した7,000点をこえる石製遺物から、瀬戸内技法による製作物であることが明らかになった。国府型ナイフ形石器、翼状剥片とともに、製作過程を示す翼状剥片石核と、盤状剥片や盤状剥片石核を含む石器接合資料を選定したものである。

石器接合資料には、瀬戸内技法第1工程、同第2工程に対応するものがある。第1工程においては、盤状剥片の剥離が6～7回に及ぶ過程がわかる資料がある。また、盤状剥片や翼状剥片には剥離と同時に壊れてしまい、それをきっかけに放棄されたとみられるものがある。さらに、国府型ナイフ形石器が少数ながら出土していることは、第1工程から第3工程までをこの場所で連続的に起こったことを示している。

採集品に基づいて定義された瀬戸内技法だったが、鶴峯荘第1地点遺跡出土品により、本技法が概念的なものに留まらないことが実証的に示された。実行されていた具体的プロセスを復元的に理解できるようになったのである。

瀬戸内技法は、後期旧石器時代の東部瀬戸内地域を中心に広くおこなわれた、西日本でも代表的な石器製作技術である。鶴峯荘第1地点遺跡出土品は、瀬戸内技法の技術体系を具体的に復元できる点が特徴で、二上山周辺のサヌカイト原産地における実態を良く示している。西日本の後期旧石器時代における、石器製作の技術的体系を理解する上で、欠くことのできない高い価値がある。

